



研究者になる魅力をいかに伝えるか？

先日医学部のフレッシュマンキャンプに参加して、「研究の楽しさ」について講演をさせてもらうという貴重な経験をした。慶応大学の医学部などを除き、一般的な私立大学の医学部に入学する学生にとり、ほとんどは臨床医になるために入学してきたのだと思う。そのような入学直後の学生に研究の話をするのは場違いな感じはあったものの、一部の学生には多少は研究の雰囲気について理解してもらえたかもしれなかった。以前に研究医養成コースで講演した時もそうだったが、「研究者になる場合には医者になる場合と比べてどのようなメリットがあるか」という点を十分に説得力のある形で学生に提示するのは非常に難しいと感じる。例えば、プリオンの研究で有名な Stanley Ben Prusiner はノーベル賞を取るために、プリオンの研究分野に参入したと何かの本に書いてあった。また今日電車の中でたまたまネットを見ていたら *PLoS Comput. Biol.* にノーベル賞を取るための10か条という論文が掲載されているのを発見した (Roberts, R.J. (2015) *PLoS Comput. Biol.*, 11, e1004084)。「研究者になれば、ノーベル賞を取れるかもしれない」という説得は、あまりにも非現実的である。

ノーベル賞の話は極端だが、それでは若い学生を研究にリクルートする時に、研究をするとこんなに人生がすばらしくなるというような具体例を、シニア研究者の我々は提示できるのだろうか？ 例えば、1) 研究すると外国の研究者とたくさん友達になり、外国にも頻回に行く事ができる。2) 大きな研究費を獲得し、いい仕事をすれば新聞やメディアで取り上げられる。3) 教授になれる。4) 臨床医と違って自分で時間を調節でき、自分のアイデアで研究ができる。5) 自然界に存在する新たな真理を明らかに

することができる。6) 自分の考えでは予想もつかないような意外な発見 (セレンディピティー) に巡り合える。など、色々あるがこれはかなり順風満帆な研究生活を送れたらという前提条件がつく。デメリットをあげればきりがない。1) 生活が不安定であり、定職につくのが困難である。2) 働いている時間が不規則で、努力しても結果が出なければ評価されない。3) 教授や研究所の部長などに昇進できる人達は一握りであり、大多数の研究者は独立できずに研究者としての一生を終わる。4) 仮に独立できたとしても研究費を継続的に獲得しなくてはいけないというプレッシャーが毎年のしかかる。

個人的な話になるが、私の場合には姑息な手段を使って家内を説得して研究を継続してきたという経緯がある。まず大学院を卒業して臨床にもどろうか、このまま研究を続けようか迷っている時に、たまたま東京にある大学の基礎の講座の助教としての就職口が見つかった。お見合い結婚した家内 (東京生まれで東京育ち) には、もし臨床の医局にもどると田舎にとばされるが、このまま基礎の研究を続けていれば、東京で暮らせると説得した覚えがある。これは今から考えると非常に姑息な手段だったと反省しているが、大学院時代にたいした成果をあげられていなかったその当時の自分がなぜ臨床医ではなく、研究者としての人生を選択してしまったかについては、現在でも明確な答えを思い出せない。そういえば私は小学生時代の卒業文集に「将来の夢は研究者」と書いた記憶があるが、数学者になる夢を捨てて、医者になるという選択を私は高校時代にする事になった。しかし結局のところ、幼少時に「研究者になる」と宣言した時から、遅かれ早かれ研究者としての道を歩む事が決まっていたのかもしれない。

雑多なことを書いたが結論としては、若くて優秀な学生 (医学生も含めて) を研究の道にリクルートするためには、研究者としての明るいビジョンを提示できるように社会全体のシステムを構築していかない限りなかなか難しいだろうと思う。

(五竹庵主人)